今月の特集

貫之終焉の地 "貫之まいり"

船出

国府史跡保存会（乾常美会長）では、「土佐日記」始まりの地として、昭和五十九年以来毎年、大津市比叡山にある貫之嗣墳墓への墓参を行っています。

今年は第十回目の記念すべき"貫之まいり"となり、大町市長、森尾市議長そろっての墓参団一行四十三人は、十月十四日夜、「土佐日記」の船出にちなんで高知港を船ならぬフェリーで出航しました。

船中では、毎回恒例の船出の酒盛りが行われ、貫之への敬慕をさらに深めました。

翌朝、大阪南港に上陸。バスで大津市へ。貫之の墓所へと向かいました。

今月の特集は、墓参団一行の方々に、裳立山（もたてやま）紀行を綴っていただきました。

貫之は、延長八年一月に京都から着任し、四年間南国市比江で暮らし、京都へ帰って行った。

土佐から京都へ向かう帰郷の船旅を記したのが「土佐日記」である。

「男もすなる日記といふ物を、女もしてみむとてするなり。

それの年の十二月の二十日余り一日の日の戌の時に門出す」

この日は、貫之にとって喜びの都への門出の日であったが、その心中は愛児を失った悲しみに、うちふさがれていたと思われる。

「見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや

忘れ難く口惜しきこと多かれど え尽さず。とまれかうまれ、とく破りてん」

と、「土佐日記」は終わっている。

都人の望郷の念と、娘を比江でなくした悲痛が迫り、松風の音が届いていたかもしれない貫之への敬慕が一層募ってくる。

露深し 第十回紀子墓参句抄

潮路

秋深むこの沖過ぎし紀氏の船　小島雅子

土佐日記の潮路を追ふて暮の秋　高橋以登

甲板を渡る夜風や秋の秋　川村正竟

土佐日記の潮路の和の温め酒　竹内とし子

裳立山・墓参

めざしたる比叡へ飛る鰯雲　橋田憲明

紀氏眠る山の小径の花すすき　小松ふみ

紅葉の尾根伝ひ行く紀氏墓参　田内賀代子

下草の紅葉あかりの林かな　武内千代子

道険し回峰行の霧の山　高橋以登

霧けしや回峰行の日々を閉ぐ　竹内とし子

えにし貫之まいり

国府史跡保存会　会長　乾　常美

国府史跡保存会の恒例紀貫之墓参旅行も、今年第十回目を迎えた。

称して"貫之まいり"。

贈従二位紀貫之卿の墓参を"貫之まいり"とは僭越であるかもしれぬが、これも私たちが敬慕する紀貫之の「土佐日記」をもっと土佐人に身近くしたい念願に発するものとして許されたい。

十年の記憶をたどってみると、毎回いろいろの"出来事"があった。しかし、苦労話の数々よりも、私は"紀貫之まいり"の縁（えにし）の輪が、次々と拡がり固まってきたことを、いまさらのように有り難く思うのである。

私が下調べのため、初めて"貫之まいり"をしたのは、第一回墓参に先立つ昭和五十九年五月。比叡山鉄道の好意で、ケーブルカーを「裳立（もたて）山」駅で停めてもらい、山道十五分をたどったが、墓所は如何にも寂しい林間にあった。

高さ一メートルに足らぬ傾いた石塔と、それに接してうずくまる石仏の小さな座像が墓の主。塔刻には「木工頭紀貫之朝臣之墳」とあって、明治元年の建立。墓前には古びた銅銭が三、四枚。

一方墓所から二十メートルの近くに立つ巨大な碑は対照的で題して「裳立山の碑」。明治四十五年の建立で、明治天皇と紀貫之の歌業を讃えたもの。それにしても、天慶八年（九四五）ころに没したと思われる紀貫之の墓石が、明治元年（一八五八）の建立とは。

この間の空白九百二十年。私たちに、この空白を埋めるすべも力もないが、幸い「土佐日記」始まりの地を、千年の史跡として持つ国府史跡保存会としてなすべきことはあった。

五十九年の十一月を第一回とする墓参に際し決められたことと、十回目の今日まで続いていることは、

一、桂浜の五色玉石を墓所の周囲に敷く。

二、お供物に、郷土ゆかりの銘菓と銘酒を持参する。

三、記念の立札を墓所に建てる。

四、出発はフェリーによる船出とし、船上で貫之をしのぶ小宴を催す。

五、会員外にも参加希望者を加える。

六、墓参後、研修ツアーを併せ行う。

五色の玉石は当初二十五キロ、あとは二十キロにしたが、石は重くとも、淋しかった貫之墓所を彩るのに随分と役立った。

この計画実行には会員で監事の村井敦喜氏の尽力が大きいが、この人は六回限りで今はたい。たき人と言えば、前市長の小笠原喜郎氏も三回続いて参加してくれた。

昨年は初めて大町市長ほか市の幹部による特別参拝団が行を共にし、今年は市長と森尾市議長が初めて揃って墓参に加わってくれた。

第十回の節目のしるしとして、永年継続した参拝者のうち、十回完遂の四人に市長からの感謝状、八、九回の四人に史跡保存会長からの感謝状がそれぞれ贈られた。

賞状には共に史跡の愛護と精神文化伝承の重要さがうたわれてあった。

比叡山一木楓の紅葉かな　秋山和子

霧の山紀貫之の墓一基　竹内とし子

紀子忍ぶる昔の友に復る秋湯　田内賀代子

実の残る楓一本紀氏の墓　中沢道子

貫之の墓へ新米供へけり　武内千代子

霧けしや復日ゝし入る紀氏の墓所　中沢道子

叡山の御僧の読経秋日和　小島雅子

秋の旅裳立に紀氏の墓訪ふ　川村正竟

叡山の麓の会場に紀氏墓参　川村雪子

霧けしや千歳数へし紀氏詣　田内賀代子

秋の陽をはすかいに受け紀氏墓石　小松ふみ

貫之の墓参を終へて見る原業　高橋以登

霧の比叡土佐より紀子の墓参団　橋田憲明

紅葉の根方紀子之墳　橋田憲明

参加者の声

高知市　田村勢喜

琵琶湖畔裳立山に線香が漂い、叡山僧侶のゆったりした読経の中を、乾会長や特別参加された大町市長ら一行の焼香が続く。

時おり舞い落ちる枯葉と梢を渡る風のほかは音のない静寂の世界、千五百八年の時空を超えて貫之と相対している観さえする。遥か延暦寺あたりだろうか鐘の音が聞こえてくる。

十回を重ねた紀貫之墓参の旅で、はるばる運んだ桂浜の五色の石は積もって苔むした「木工頭紀貫之朝臣の墳」の墓石に調和し、一段と花を添える。泉下の貫之も国府史跡保存会の格好の発意と努力を心から喜んでくれているだろう。おりから木漏陽が人々にそそぐ。

乾会長との御縁で昨年から墓参旅行に加えていただいた私は、わずか二回の新米で不勉強だが、墓参後の研修旅行も実に意義がある。

南国市の一市民グループが自ら立ち上がったこの催しは決して派手ではない。しかし、文化を興す原点であり地域おこしの手順を証明していると思う。この手づくりのエネルギーが結集されない限り、本当のまちおこしは難しいように思う。そうした意味で保存会の功績を称えたいし、ますますの発展を祈ってやまない。

国分　葛目正己

坂本からケーブルで裳立山駅を降りて、約二十分歩くと貫之公の墓所がある。

きれいに掃き清められていた。墓前に並べられている桂浜の五色の石の上に、新たに持参された石が加えられて一層美しくなった。記念の立札も今回十回目で建てかえられた。「土佐日記始まりの地、南国市国府史跡保存会より五色の石を献ずる」と墨書きされた真新しいものである。

坂本より比叡山に登るケーブル会社は、南国市明見の方の経営であり何時もお世話になっている。昭和七年に設立されたもので、今年新装され七月に車輌も取り替えられたと聞いた。我々の十回目の墓参に合わせてくれたような気がして、気分は清々しく参拝できた。

墓参も乾会長らのご努力で十回目を数えた。延暦寺の僧侶のお話の中で、

「十は一に返って始まりである」と言われた。

我々も一層気持ちを新たにしてこの墓参を継続していくことを誓い、保存会がますます発展していくよう、努力しようでにありませんか。

下調べ墓参
（59・5・26乾会長）

高知市　森サヨ子

裳立山への第十回の墓参は、使命感とご熱意ある乾会長、竹内副会長はじめ国府史跡保存会の方をメーンとして盛大に行われました。

昨年は雨上りのあとの、大阪行きフェリーは数メートルの高波をあびたことでしたが、今年は温暖で波風もなく恵まれた船旅でした。

船中では恒例の「船出の宴」が催され、楽しい一刻を過ごしました。

改装された比叡山ケーブルで、きらめく琵琶湖を眺めながら裳立山へと向かいました。

「継続は力なり」と言いますが、十年間の乾会長のご苦労は、私などに伺い知るべくもなく、並々ならないものがあったと思います。

宝庫「土佐日記」を思うと、「為家の写本」が世に出た時に、歌人井上年夫氏など知事に購入を陳情されましたが、当時の予算の都合で断念されたということはとても残念なことでした。

第一回目の墓参記念の標柱も、まだ新しいものに建て替えられてあり、御僧の読経のもとに、お祭りが厳かに心をこめて行われました。私は三回目で身体の都合上、本回が最後かも知れませんが、十回目の墓参を記念し感謝のお礼を申し上げます。

貫之まいり

久礼田　沢村義正

ささ浪の大津は、万葉以来、詩歌に詠まれ、数々の歴史を秘めた歌枕の地であり、坂本は菊料理と石垣の技を伝承する落ち着いた里である。

ケーブルの終点延暦寺への八合目、裳立山停留所の板橋を踏む。鉄輪のきしみが松林に去ると突然蟬の音が響いてきた。

急坂を登ると緩やかな起伏となる。間をおいてまた錦が響く。

西に深い谷を隔てて宿坊が見え、東方樹々の間に、「ささ浪の志賀の湖」がある。

貫之はこの地をこよなく愛し、「終の地」と望んだという。数本の檜の大樹に守られて、尺余の舟形光背の石仏が座す。

これが古今集の代表歌人その序にわが国初の歌論を構成した、土佐日記の作者のみ墓なのか。

香の煙が漂い、叡山の御坊の読経が流れる。

分秒も休みなく変化する世界があり、幾百千年の姿を保つ世界がある。裳立山参拝の旅は千年のタイム・トラベルであった。

国分　西田楠男

紀貫之墓参は本年十回目を迎えました。私もこの墓参に会員の一人として毎回参加しております。

今回は過去になかった良い天候と気温に恵まれ、また比叡山鉄道のケーブルも新装となっており、坂本―裳立山間を快適に運んでくれました。

大町市長、森尾市議長もそろって参拝され、第十回目の節目の墓参にいろいろと花をそえていただき意義ある墓参となりました。

九回目が陽の数の最上位で十回目は次の始まりとも言われます。

十回目を次の出発点としてこの墓参そして墓参後の近所県各地の史跡、名勝、考古地などの研修も合わせて続行して下さるよう希望します。

最後に会員の一人としてこの"貫之まいり"に市民の皆様方の暖かいご支援をお願い致します。

裳立山には、約一㍍の高さの「木工頭（もこのかみ）紀貫之朝臣の墳」の銘が入った石碑と石仏が残っている。

この石碑は、幕末の歌人渡忠秋が、当時知る人も希になった貫之の墓を尋ね当て、それを後世に伝えるために建てたといわれます。

持参した桂浜の五色石や酒果物、菓子など供え、延暦寺の僧の読経に手を合わせた。

国分　竹内とし子

墓参旅行の世話人の一人として、十年十回の参加が叶ったことは本当に嬉しく、その都度それなりの成果を上げてきたと思います。その中で一つ残念に思われるのは必ず参加してくれることを決めておられた故小笠原市長様、国府史跡保存会幹部の村井氏を失ったことである。

貫之の墓は延暦寺境内の山中裳立山。その指径は時なし苔が深く尾根づたいの、一人では淋しすぎるほど露深い場所に、ただ一基、国府史跡保存会に護られて明るさを取り戻したかのように建っている。

宮廷歌人として名高い貫之が、土佐の国司として任務を終えその帰路を記した土佐日記は、今南国市はもとより高知県の誇りとして土佐人の身近な存在になりつつある。

この精神文化の源流を我々のみならず若人たちへも伝承していかなければならない。幸いに大町市長様はじめ市議会の深いご理解をいただき、貫之顕彰に大きな渦の輪が広がりつつあることは私にとっては大きな期待であり、一隅を照らす一人としての協力は惜しまないつもりです。

貫之まいりの今後の課題は若い層への参加の呼びかけであろう。

早くも十一回目の行程を積りつつ…。